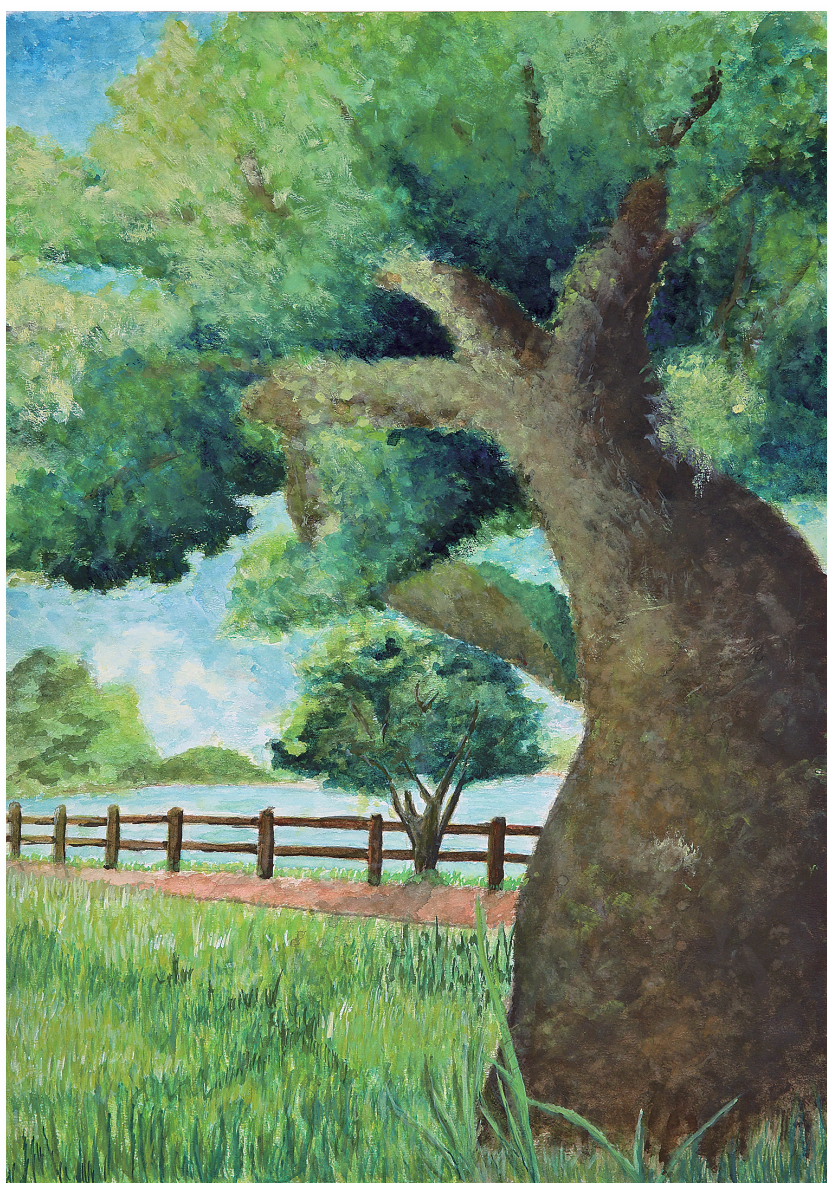


北相 61

HOKUTOH



岩手大学教育学部同窓会 2022

目 次

表紙絵 「生命」

盛岡市立黒石野中学校

3年 松 坂 陽 羽

巻頭言

変革的で主体的な教員の養成に向けて 教育学研究科長 田 代 高 章…… 1

特 集

児童・生徒の可能性を引き出す特別支援教育の今

多くの理解と深い理解が子どもを育む	小山田 秀 次…… 2
幼児児童生徒の可能性を引き出す特別支援学校の取組	佐 藤 信…… 3
「共に学び、共に育つ教育」の推進	五安城 正 敏…… 4
どの子にも共通の未来を	執筆者名不掲載…… 5

桐の葉物語

学ぶ楽しさの発見	和 野 彩 月…… 6
教育は人なり 教育は愛	千 田 麻 子…… 7
大学時代を振り返って	五日市 弘 誉…… 8
かけがえのない宝物	城 守 崇…… 9
国語科「中村研究室」	瀧野澤 公 美…… 10
岩手大学に支えられた教員人生	阿 部 真 一…… 11

キャンパス便り

大学での学生生活を振り返って	小 岩 拓 文…… 12
出会い	金 英 蓮…… 12
将来の夢や目標がもたらす幸せ	中 井 美 智…… 13
すべてに感謝	我 妻 駿…… 14

思い出

ツマとしての教師生活	宇佐美 公 生…… 15
岩手大学だからできたこと、できること	田 中 成 行…… 16

事務局便り	17
会計報告	18
北桐会役員一覧	19
編集後記	20



変革的で主体的な教員の養成に向けて

教育学研究科長

田代高章

北桐会の皆様には大変お世話になっております。岩手大学大学院教育学研究科（教職大学院）は、平成28年の開設以来、早くも6年が経とうとしております。本学は、主に学部卒業段階で進学してくる学卒院生と学校現場にて一定の教員歴を有する現職院生で構成され、各学年8名ずつ、1学年計16名の定員を基本に運用されています。教職大学院は、高度な教育実践的指導力を備えた専門職業人を育成する研究機関です。そのため、院生には、在学期間中に教育実習を義務化し、理論と実践の融合として教育実践研究報告書の提出を求め、修了後は学校現場において、学卒院生は即戦力となる新任教員として、現職院生は中核的な中堅教員として活躍することが期待されています。

大学院生は、2年間の実践研究を土台に、今後、様々な課題の解決に率先して取り組み、岩手県をはじめとする教育界に刺激を与えうる存在となることを確信しています。

現代は、VUCAの時代といわれるように、Volatility（変動性）・Uncertainty（不確実性）・Complexity（複雑性）・Ambiguity（曖昧性）を特徴とする、先行き不透明で将来予測が不確実な時代ともいわれます。新型コロナウイルス禍もそのような未知なる課題といえるでしょう。

このような時代状況において、教師として子どもたちに学校教育を通じていかなる「力（資質・能力）」を育てればよいか、あらためて吟味する必要があります。今回改訂の学習指導要領においても、子どもに育みたい「資質・能力」について、三つの柱として整理されたところです。さらに、これまでOECDが示してきた「キー・コンピテンシー」も、OECDの「Education 2030」プロジェクトにおける検討の中で、2030年の未来の創造に向けて求められる三つの「力」、すなわち「対立やジレンマに対処する力」、「責任ある行動をとる力」、

「新たな価値を創造する力」として新たに提起されています。これは、子どもに対して育成が求められる力ですが、現代の教師に求められる力でもあると思います。

この三つの力は、例えば、子どもとの関係、同僚教師間での関係、保護者や地域の人々との関係など、多様な他者との関わりの中で生ずる対立やジレンマに対して、異なる立場から対象や相手を共感的に理解し捉え、創造性をもって対立を調整できる力。他者や社会との関わりの中で誠実に自らの行動を省察し評価する力。現状に疑問を持ち、他者と協働しながら既存の枠組みにとらわれずに創造的に考え、新たな知識や概念、考えや解決策等を生み出す力。というように捉えることができるでしょう。

これからの時代において教師に求められるのは、どのような資質・能力を子どもに育みたいのか、教育目標を絶えず吟味すること。そして、目標実現に向けた教育内容の研究と創造を踏まえ、目標に適した多様な学習方法の模索と選択に努める力量です。教師は、教育目標－内容－方法を一体的に捉え、その教育効果の検証と改善について、同僚や関係者とともに自ら主体的に取り組む力を高めなければならないと思います。

教師は、絶えざる創造性を持ち、反省的な実践家として生涯を通じて成長し続けていきます。そのような、変革的で主体的なエージェントとしての教師をどのように育てていくかが、本学教職大学院の使命であるとともに、現在の教育界の課題でもあると思います。

北桐会の皆様をはじめ、多くの関係者の皆様のご支援・ご協力をいただきながら、院生も教職員も成長できればと思っております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

[特集] 児童・生徒の可能性を引き出す 特別支援教育の今



多くの理解と深い理解が子どもを育む

盛岡市立仁王小学校

小山田 秀 次

特殊教育が平成18年度から特別支援教育となり、早いもので15年が経過しました。それまで、通級指導教室や特殊学級、養護学校において教育を受ける子ども達が対象の教育と認識されていたものが、発達障がいという概念が示され、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする子ども達も対象となりました。また、この間にLD通級指導教室の設置や研修が実施され、教員全体にこの子ども達の特性にかかる理解が広がってきました。

実際の指導にかかわっては、本年度開かれた岩手県特別支援教育研究会の宮古地区大会で、通常の学級における特別な支援が必要な子ども達の指導について実践研究が進められたことから、先生方のニーズが高いことが伺われます。また、前回の岩手地区大会では保護者の理解を図るため、滝沢市の全ての小学校で統一した資料を基に説明する取組が紹介されました。その取組は現在も継続されており、説明用のパワーポイントは、他地区の学校でも転用して活用されるようになりました。

各校においては、特別支援教育支援員を活用して個別の対応等が進められています。支援員については、年々増員され、現在、県内小・中学校、義務教育学校(以下、小・中学校等)の学校数の1.4倍にあたる人数が配置されていますが、岩手県特別支援学級・通級指導教室設置学校長協議会(以下、県特協)の調査では、約7割の学校がさらなる増員を希望しています。

特別支援学級の状況については、小・中学校等において、在籍が一人の場合でも新設されるようになり、現在では県内の88%の小・中学校等に設置されています。

このことに伴い、特別支援教育の免許を取得していない未経験の教員が担任になるなど、教員の専門性の確保が課題となっています。この状況は全国的な課題でもあり、他県では、教員採用試験において、特別支援教育免許状の所有者に対して加点をしたり、小中学校の採用に特別支援教育推進枠を位置付けたりしているところもあります。岩手県では県教委等の研修とともに、校内での人材育成を中心に取組を進めています。

本年度の県特協の岩手大会では、校内の特別支援コーディネーターと生徒指導との連携を図った取組や、特別支援学校のセンター的機能を活用した巡回訪問や個別相談など、関係機関と連携した取組等、様々な資源を活用した人材育成の事例が紹介されました。

その他、医療や福祉との連携も図られており、申し込みから受診まで時間を要するという医療の状況はありますが、ケース会議等において支援方針や役割分担などを検討し、支援の充実が進められています。

このように特別支援教育をめぐる体制は整いつつありますが、各校の取組にかかる課題もみられています。

学習指導要領の改訂で特別支援学級等において義務づけられた、個別の教育支援計画と個別の指導計画の作成については、県特協の調査によると100%に達していないという現状があります。同様に、交流及び共同の学習の実施については、21%が未実施の状況にあり、その内「交流の要請がない」ことを理由とする学校が約7割あります。相互の触れ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする側面からも、文通や作品の交換といった間接的な交流も含めて全ての学校で実施することとなっており、今後も理解を進めていく必要があります。

これまで述べてきたように、特別な支援を必要とする子ども達を育むためには、周囲の方も含め関わる多くの方々の理解と、その子に対する深い理解のもとに支援することが必要です。

現在は大学のカリキュラムで、特別支援教育について学ぶ機会があるとお聞きしていますが、子ども達に共通した処方箋を描くことはできません。分かったつもり、分かっているつもりが、子ども達に接する時一番危険であると思います。だからこそ、今現場にいる私たちも、これから教員になろうとしている方々も、実際に子ども達と接して、目の前にいる子ども達が何を求めているか、行動の要因は何か、といった子ども達を見る目を磨き続けることが大切であると考えます。

(昭和60年 小学校教員養成課程 算数・数学科 卒業)



幼児児童生徒の可能性を引き出す 特別支援学校の取組

岩手大学教育学研究科

佐藤 信

平成 19 年 4 月の改正学校教育法の施行により、特殊教育から特別支援教育への転換が行われ、特別な支援を必要とする全ての幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じて、その可能性を引き出し、伸ばす教育へと切り替わった。併せて、それまでの障害種別の養護学校から特別支援学校へと移行され、障害種にとられない複数の障害に対応した教育を行える学校となった。

県内の特別支援学校は、岩手大学教育学部附属特別支援学校をはじめ、県立特別支援学校 15 校、私立特別支援学校 1 校の計 17 校が設置されている。

盛岡地区の特別支援学校を除いた県立特別支援学校は、知的障害と肢体不自由など複数の障害に対応し、地域の様々な障害のある児童生徒への支援を行っている。

また、特別支援学校（8 校）では、通学が困難な児童生徒のために寄宿舎を設置している。寄宿舎では、学校と連携しながら寄宿舎生活をととして社会性や自立に向け生活する力の育成を図っている。

併せて、盛岡みたく支援学校、花巻清風支援学校及び一関清明支援学校には、通学が困難な児童生徒のために居住地の小中学校に分教室を設置している。分教室と設置小中学校の子供たちは、日常的な交流をととして、障害のある子もない子も分け隔てなく自然に接する中で、お互いの理解を深めている。

特別支援教育における特別支援学校の役割は、障害のある幼児児童生徒への指導・支援の充実と、特別支援教育のセンター的機能を発揮し、地域の特別支援教育の推進・充実を図ることがあげられる。また、共生社会の形成に向けて、豊かな人間性や多様性を尊重する心を育む交流及び共同学習を推進する中心的役割を担っている。

特別支援学校は、通常の学校の目的とともに、幼児児童生徒が、障害による学習上及び生活上の困難を主体的に改善・克服し、自立と社会参加できる力を育むことを目的としている。特別支援学校の障害の多様化、重度・重複化の中で、障害の状況に応じた教育課程を編成（類型化）し、個別の指導計画等の作成をととして、障害の特性に応じた

指導方法の工夫や児童生徒一人一人の教育的ニーズに即した指導を行なっている。児童生徒が自立的・主体的に学習活動に取り組み、自らの力を伸ばす授業づくりを目指している。さらに、教職員の対応だけでは指導・支援が困難な場合、看護師や機能訓練士等の外部専門家と連携し、児童生徒への指導の充実を図っている。

また、多くの学校では、小学部から高等部まで設置されており、高等部卒業後の進路を見据えた指導・支援を行っている。特に高等部では、作業学習、校内実習や産業現場等実習（就労体験）等の取組をととして、職業生活等に必要な知識や技能及び態度を身に付けたり、生徒の職業意識や就労への意欲を高めたりするなど、将来の社会生活や自立に向けた教育に取り組んでいる。

特別支援学校のセンター的機能では、主に支援部を中心に、幼稚園や小中学校への継続訪問支援や冬季休業中の特別支援教育ステップアップ研修講座の開催、小中学校等からの要請による教育相談への対応を行ってきた。地域毎に特別支援教育コーディネーター連絡会を開催し、地域の情報共有や特別支援教育コーディネーターの養成等を行ってきた。併せて、特別支援学校の研究・研修の充実と地域の特別支援教育の充実を目的に令和元年度から学校公開研究会を開催してきた。これらの取組をととして、地域の特別支援教育の推進、小中学校等に在籍している児童生徒等への支援の充実を図っていききたい。

交流及び共同学習の推進に関わり、本県では、平成 22 年度から居住地の小中学校に副次的な籍をおく「交流籍」を活用した交流及び共同学習に取り組んでいる。学校間交流等の取組とともに、居住地域との結びつきを強め、人間関係の広がりや仲間として、共に助け合う中で支え合う大切さを学ぶ良い機会となっている。

最後に、校種を超えて連携することで、地域の共同体として、本県の特別支援教育の理念である「共に学び、共に育つ教育」を推進し、子供たちが自らの可能性を伸ばし、心豊かで主体的に生活できる共生社会の実現を願っている。

（昭和 59 年卒 小学校教員養成課程 教育学科）

[特集] 児童・生徒の可能性を引き出す 特別支援教育の今



「共に学び、共に育つ教育」の推進

県教育委員会事務局

五安城 正 敏

我が国の障がいのある子供を取り巻く環境は、平成 18 年の「障害者の権利に関する条約」の採択以降、平成 19 年の「特別支援教育」を位置付けた改正学校教育法の施行等の法・制度の整備により大きく進展しています。一方で、学校現場では、子供たちの障がいの多様化、就学相談の困難さ、特別支援学級担任等の早期交代、指導技術継承の不十分さなどが課題となっています。

令和 3 年 1 月には、「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告」が取りまとめられ、以下の 2 点を引き続き進めていくという方向性が改めて示されました。

- ・障がいのある子供と障がいのない子供が可能な限り共に教育を受けられる学びの場の整備
- ・障がいのある子供の自立と社会参加を見据え、一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できるよう、通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある多様な学びの場の一層の充実・整備

これらの方向性を実現するため、障がいのある子供の学びの場の整備・連携強化、特別支援教育を担う教師の専門性の向上、GIGA スクール構想による 1 人 1 台端末等の最新の ICT 技術の活用、関係機関の連携による切れ目ない支援体制の整備を進めることとしています。

本県では、これまでの特別支援教育推進プラン、そして現在の「いわて特別支援教育推進プラン(2019～2023)」により、「共に学び、共に育つ教育」を推進し、共生社会の実現に向けて取り組んでいます。

具体的には、特別支援学校・特別支援学級・通級指導教室の総合的観点による整備、地域に根差す特別支援学校分教室の運用、「交流籍」を活用した交流及び共同学習の実施、管理職・指導主事等研修の実施、継続型ステップアップ研修の実施、特別支援学校におけるタブレット端末等の活用、各教育事務所への特別支援教育エリアコーディネーターの配置、関係機関と連携した発達障がい児支援体制・医療的ケア実施体制・難聴児支援体制の整備、引継ぎシートの活用などの取組を進めています。また、いわての「授業ユニバーサルデザイン」として、子供たちを中心に据えた、教

科教育と特別支援教育との融合による授業づくりを推進しており、多くの学校において実践が積み重ねられています。

これらの取組は、「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告」において、今後進めていくこととしている内容と同様の取組であり、このことは、これまで諸先輩方が切り拓いてきた本県の特別支援教育の方向性と歩みの確かさを示しているものと言えます。

このように本県の特別支援教育が確かな歩みを進めることができている背景には、小中学校等と特別支援学校、行政等が一体となって、特別支援教育の充実発展に努め、その振興を図ることを目的とする岩手県特別支援教育研究会の存在があげられます。本研究会には、岩手県特別支援学校連絡協議会、岩手県きこえ・ことば・LD 等教育研究会（令和 4 年度名称変更）等の各団体が所属しており、校種や障がい種を超えたさらなる連携と発展を期待するところです。

平成 8 年、岩手大学教授の中山文雄先生、元盛岡養護学校長の佐藤静夫先生が中心となり、『岩手の障害児教育史』が刊行されました。本書は、草創期からこの教育にかけた先人の道程を確認し、今後の進むべき方向を展望・洞察するための貴重な財産です（平成 22 年『岩手の障がい児教育史～特殊教育から特別支援教育への発展～』刊行）。『岩手の障害児教育史』には、昭和 25 年、戦後本県最初の精神薄弱学級（現在の知的障がい特別支援学級）を開設した岩手大学学芸学部附属盛岡市立仁王小学校長の佐藤正忠先生による学級開設の意義が次のように記されています。「おのおの教師が、ひとり残らずすべての子をそれぞれ人間として貴重に取り扱い、それを生かすこと、それは特殊教育を新しい意義において復活し、この経営をとおして職員の全部に個人差に徹する教育の意義を浸透させていくことである。」

特別支援教育は、特別な支援を必要とする子供が在籍するすべての学級において実施されるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味をもつものです。佐藤正忠校長先生の言葉をすべての教育関係者と共有し、本県教育の一層の推進を図りたいと考えます。

（平成 6 年 小学校教員養成課程 社会科 卒業）

どの子にも共通の未来を



時々夢を見る。

お話が苦手だった教え子が大人になり、久々に会った私に“自分がいかに意に沿わない扱いを私から受けたか”を淡々と訴える。ひたすら謝る私。

初任以来、困難さを抱えた子どもたちと学校生活を共にしてきた。その間、子どもたちの目線で物事を見ようとすればするほど、周囲に理解と協力を求めなければならず、「子どものためなんです」と前置きし、周囲に噛みついたこと数知れず。いつの間にか強い自己主張をするおばさんになってしまっていた。ふとした時に過去の“場面”がよみがえり、身の置き場がないほど切ない気持ちになる。そして、子どものためには仕方がなかったんだと自分を納得させる日々がいまだに続いている。

多くの学びを授かった。車椅子の子どもの付き添いを忘れた私を「あんたなんかに子どもを預けられない」と叱責したお母さん。子の安全を願う親の思いの深さを叩きこまれた。あの一言がなければ、この生活を続けてこなかったかもしれない。苦い思い出ではあったが、あの一言が私を支え励まし続けてくれた。

ある福祉施設の自治会での利用者の発言「私も源氏物語を勉強したかった」も忘れられない。彼女は作業学習に多くの時間を費やし、好奇心を満たすことができなかった無念さを語った。「教育、福祉は（当事者抜きに）外で語られる」を痛感した出来事だった。

「できないことはそれほど怖いことではない。本当に恐れなければならないことはそのことを叱責され、非難され、自信を失い、希望を失うこと」、「先生方は全員を白鳥に育てようとするからいけない。白鳥の子は白鳥に、アヒルの子はアヒルに育てればいいだけ」、「人はパンのみにて生きるにあらず」、「明日に希望を持って生きることは基本的人権」、「教育も福祉も（人を）断ってはいけない」。多くの先輩が私に歩むべき「道」を示してくださった。

昭和、平成、令和と歳月が流れた。いい時代になったと実感している。社会では「多様性の尊重」が声高に謳

われ、岩手発のアート作品が東京 2020 の閉会式を彩り、共生社会、多様性の文字を紙面、画面で見ない日はない。社会は確実に変化を見せている。

インクルージョンの風を全身で感じながら、自分の学んできたことでいかに学校運営に寄与するかを考え、訴えてきたことがある。

1 インクルーシブな教育の推進を

岩手の特別支援教育推進プラン「共に学び、共に育つ教育」が、特別支援学級と通常の学級の双方から推進されますように。

2 通常の学級における「わかる授業」の実践を

通常の学級で学習している支援を必要としている子どもに、「その子にとっては必要な支援、他の子にとってはあると便利な支援」が当たり前に行われますように。

3 特別支援学級の教育の充実を

様々な困難さを抱えた子どもが高い専門性を持った教員の指導支援の下、有意義な学校生活を送り、自己実現を果たすことができますように。

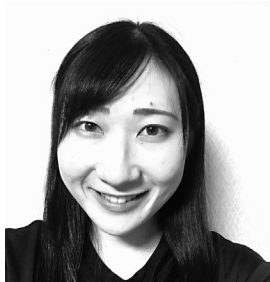
4 教育相談に特別支援教育の視点を

豊かになったといわれる社会。一方で子どもの中には「生き辛さ」「生活のし辛さ」「満たされなさ」を抱えた子どもがいる現状がある。その子どもたちにふさわしい支援と援助の手が伸びますように。

どの子にも共通の未来を

いずれの子どももかけがえのない一人として周囲に認められ、生きがいを持って暮らしていくことができますように。いずれの子も望まれて生まれてきたのだから。

[桐の葉物語]



学ぶ楽しさの発見

和 野 彩 月

私は大学を5年かけて卒業した。入学時、第一志望の大学ではないと臍を曲げ、免許取得も卒業要件の2つでいいやと思っていた。しかし気付けば教育を学ぶために留学し、5年も大学に在籍し、5つの免許を取得し、1つの副専攻科を修了した。学びと学びがつながっていく楽しさを感じたことが、大学を好きになった契機だと思う。

大学における私の専攻は特別支援教育であったが、幼稚園から高等学校の教育、日本語教育も学んだ。大学になって再会した中学時代の恩師からアドラー心理学を学ばせていただくこともあった。

大学で学んだ生徒指導と特別支援教育、アドラー心理学それぞれにおいて、分野の名前は異なっても、困っている子どもの捉え方と支援のアプローチが似通っていた。講義を通して、それまでは「困った子ども」、「意地の悪い子ども」に見えていたものが、「支援を求めている状態にある子ども」に変わった。これは子どもだけでなく、自分自身の対人関係に当てはめることができる見方だった。私にとって関わるのが難しく感じている人でも、関わり方に何かしらの配慮が必要な人なのだと気が付くと、苦手な人が極端に減り、対人関係が途端に楽になった。何かを学び深く理解すること、それを実生活に適用していくことは、自分の生きやすさに繋がるのだと分かり、学ぶことに前のめりになった。この理解は、今後の人生に生きる重要なパラダイムシフトだったと思う。

日本語教育の先生から、「特別支援教育と言語教育は似ている。」と言われた。最初はよく分からなかった。しかし、留学経験を振り返ると、言葉は不自由、土地勘は無い、その土地の文化やコミュニケーション様式は分からない、「日本人」として見られるというマイノリティ体験があった。海外において私は、ある種障害者であった。特別支援教育も言語教育も、社会とその人との接点に何かしらの障害があると捉え、それを取り除いていくという役割がある。自身の経験と照らし合わせると先生の言葉に納得でき、理論と実践が合致する爽快感にはまった。

大学外で子どもと関わる経験をしたことも貴重な経験だった。アルバイトで塾講師と一般社団法人の貧困支援を行

った。学習塾では、学力向上以外に学習時間の確保や不登校傾向の子どもや家庭でストレスを溜めている子どもの居場所支援を目的とする家庭もあると分かった。貧困支援の学習会では、家庭でもない、学校でもない、塾でもない第4の居場所の役割を学んだ。評価されることのない場であるからか、子ども達は他の場で言えないようなことをポツポツと語ってくれることもあった。内容によって話す相手を選んだりもしていた。これらの経験は、私にとってプラスに作用した。なぜなら、子ども達にとっては学校だけが全てではなく、ましてや私だけが彼らの唯一の資源ではないと気付けたからである。勿論私が彼らの頼れる存在になれば嬉しいが、学校内でさえも私以外の先生達が沢山いる。そう思うと「私だけで」彼らの全てを支えなければという過剰な気負いが消えた。私にできるのは、子どもにとっての資源の1つになれるよう努めること、彼らがもっている資源に気付かせ、上手く活用できるようサポートすることだと思う。

特別支援教育実習の際に、印象的だった言葉がある。「支援の手立ては、苦手なことを得意にするためのものではありません。苦手なことにも自然に取り組めるようにするためのものです。」というものである。働き始め、指導主事の先生から「Cの子をBにできるようなサポートを増やしましょう。」と言われ、この言葉を思い出した。特別支援教育を特別なものに考えすぎていたなと気付き、また、通常教育においても当てはまる考えだと気付くことのできた言葉だったな、と思い返した。大学での学びは、今も確実に繋がっている。

「誰かにとっての先生になりたい。」私が目指したのは職業としての教師ではなく、誰かの何かの方針や拠り所となるような存在だ。私は今年度から中学校の英語教師として働いている。教師にはなったが、誰かにとっての先生になるには程遠く、力不足を感じる日々である。まだ担える役割は少ないが、「正統的周辺参加」の考え方を心の支えに、一つひとつレベルアップを目指したい。

(令和3年 学校教育教員養成課程

特別支援教育コース 卒業)



教育は人なり 教育は愛

千 田 麻 子

「あなたの声に耳を澄まし あなたの声にほとばしる愛を知る」

『決意』という曲の一節。歴史作家・司馬遼太郎さんの書いたエッセイ『二十一世紀に生きる君たちへ』に基づいて描かれた曲であり、私が教壇で初めて子ども達と学びを共にした忘れられない一曲である。

この曲と出会ったのは、大学3年生9月。教育実習で受け持つ学級が、校内合唱コンクールの自由曲として選んだ曲であった。自信はなけれど目の前の責任は果たそうと、ささやかな決意をして始まった実習。受け持った3年4組の授業は、なかなか思うようにいかなかった。3年4組には、ユニークな男子生徒4人組がいた。「なんで?」「どうして?」と、予想外の質問が次々とくること…。切り返せず、授業が止まる。今となっては、思うように、とか、切り返そうとか思っている事自体が課題だと感じるが、当時は気付けなかった。ただ、自分の未熟さゆえに、この子達の意欲や気持ちを拾えていない情けなさは感じていた。

最後の授業の日になった。何にしよう。何を伝えよう。悩んで考え、投げかけた言葉は「『あなたの声にほとばしる愛』って、どれほどのものだったんだろう?」曲中の『あなた』とは司馬さんの事だ。二十一世紀に生きられないと悟った司馬さんが、未来を担うあなた達に愛をもって残した詩なんだ。その愛、感じられている?そういう声で歌えている?と。音楽室がしーんとなった。いつもの男子の盛り上がりがない。また、授業が止まった。うーん、難しすぎた?押しつけがましかった?最後の授業だったのに…と負い目を感じて迎えた実習最終日、教室室で実習録を書いていた時の事である。

「(……先生～!!)」

かすかな声の方向を見ると、ドアの隙間から手招きが見える。促されるままに廊下に出ると、あのユニーク4人組がいた。この位置に立ってください!と彼らは言う。

「千田麻子さんへ あなたの授業はとても素晴らしいものでした よってこれを賞す」

渡されたのは、手作りの賞状であった。そしてちょっぴり恥ずかしそうに「合唱コンクールも見に来てくださいね。」と言ってくれた。とても嬉しかった。こんな自分を招いてくれた。教生室には「生徒入室禁止」の張り紙があった。知っていてこ

っそり来てくれたのかな?不甲斐なさでいっぱいだった心がポツと明るくなった。

合唱コンクール当日。3年4組がステージに立つ。なんだか自分もステージに立っているようで、緊張した。彼らが歌い始めた瞬間、会場の空気が変わった。ただ歌うのではなく、愛が溢れるようなあたたかさのある音楽だった。見ないうちにこんな音楽づくりをしていたんだ。特に目に入る子達がいた。4人の男子生徒である。笑顔がすてきな子達であったが、この日の顔は違った。真剣な顔だった。このステージをやり切ろうとしている顔。子ども達の笑顔は美しい。しかし、真剣な顔はもっと美しいものなのだと思感じた。「教育の世界を見てみたい。」それまで採用試験を受けるか決めきれずにいた私は、ステージを降りる彼らの晴れ晴れとした表情を見て「決意」した。

千葉で送り出した初めての卒業生が、今年二十歳になる。卒業年の学年合唱曲は『決意』であった。昨年度、故郷岩手で初めての卒業生を出した。担任した3年生が最後の合唱コンクールで選んだ曲も『決意』であった。そして、今年度から『決意』に出会った学校に赴任した。それだけでも奇跡なのだが、自分の教育実習校なんですよ、と言うと、保管していた当時の卒業アルバムを見せて下さった。あの4人組に再会した。『決意』が結ぶ奇跡のご縁の連続に、尊さを感じずにはいられない。

「オペラ劇場の音楽監督が誰であるかよりも、片田舎の小学校の音楽教師がどのような人であるかの方がはるかに大切だ。」大学に就職を報告した時、こう言って送り出して下さった先生がいらした。専門家は自分の音楽の責任は自分に返ってくるが、教育者は自分の音楽の傍らに必ず子どもがいる。間違っものに触れたまま、学び舎を巣立つかもしれない。その責任は取りようがない、と。千葉でお世話になった初任者指導の先生はいつも「教育は人なり 教育は愛」と仰った。教育者として自分の音楽はどうか、と一生自分の原動力となるであろう言葉をかけて下さった方々との出会い。どのような人であるか、人としてほとばしる愛に欠けていないだろうか、我に立ち返るきっかけを与えて下さる方々との出会い。そして、教師になることを「決意」させてくれた子ども達との出会い。初心忘るべからず。出会いとご縁に感謝し、これからも愛を大切に教員人生を歩んでいきたい。

(平成26年 芸術文化課程 音楽コース 卒業)



大学時代を振り返って

五日市 弘 誉

私がこの原稿依頼を頂いたのは令和3年11月下旬、岩手大学硬式野球部の2学年上の先輩であり、現在「北桐」編集委員長を務めていらっしゃる菅原純也さんからの一本の電話でした。野球部の先輩からの直々のご依頼とあり、二つ返事で引き受けさせていただきました。早速書き始めようとしたのですが、私は文章を書くことが苦手だったことを思い出しました。拙い文章ではありますが、最後までお読みいただければ幸いです。

大学時代を思い出すために、卒業アルバムを久しぶりに捲ってみました。自分も含めた友人たちの若々しい姿と、巻頭詩として掲載されていた宮澤賢治の詩が印象的で、胸が熱くなりました。

生徒諸君に寄せる

宮澤賢治

この四ヶ年が
わたくしにどんなに楽しかったか
わたくしは毎日を
鳥のように教室でうたてくらした
誓って云ふが
わたくしはこの仕事で
疲れをおぼえたことはない

諸君はこの颯爽たる

諸君の未来圏から吹いて来る

透明な清潔な風を感じないのか

岩手大学での4年間は正に「青春」そのものであり、多くの方々からの教えを頂き、勉強と部活動に没頭しながら「未来圏から吹いて来る」風を感じていたように思います。

私は、高校の数学教員を目指して岩手大学教育学部中学校教員養成課程数学科に入学しました。中学校から野球を始め、高校でも硬式野球部に所属していた私は、大学では別のサークルに入りたいと思っていました。しかし、高校の野球部の先輩から「部員が少ないから入ってくれないか」と必死に勧誘され、断ることもできず、入部することになりました。それからの4年間は野球中心の生活ではありましたが、多くの貴重な経験をすることができました。

朝6時からの大学野球場での練習。授業が終わってからの練習。澤村先生から大学野球とは何かを教えていただいたこと。リーグ戦の際には主務の方が安い宿舎を探してくれ、車を乗り合わせて移動したこと。北東北大学野球リーグ1部残留を果たして朝まで祝杯をあげたこと。3年生の春に2部に降格し、自分がキャプテンを務めた4年生のときも1部に昇格できず、責

任を果たせず苦杯を嘗めたこと。土日にはOBの方がノックを打ちに来てくださったり、アドバイスをしてくださったりしたこと。その他にも、ここには書くことができない数々の楽しい、恥かしい経験もしました。

高校時代はレギュラーではなく、先輩から誘われて入部した私が、大学4年生まで野球を続けることができたのは、当時の野球部の監督、先輩後輩の「岩手大学硬式野球部」への熱い想いを身近で感じてきたからです。その想いを受け継ぎ、頼りない主将でしたが、同学年の主務や後輩、多くの方々に支えられて大学野球を全うすることができました。その中でたくさんの出会いがあり、現在の自分を形作っているのだと実感しています。

また、数学に対する考え方が大きく変わった4年間でもありました。

大学での初めての数学の試験が1年生の前期で受けた小宮山先生の「線形代数学」の試験でした。全てが証明の問題であり、大学の数学の試験も高校の数学のテストのようなものと油断していた私は、圧倒されました。高校時代は問題を解くことが楽しく、それが数学の面白さであると考えていました。しかし、大学の数学の授業を受けて、解けるだけではなく、方針を立て、論理立てて考えることの大切さを学び、現在の高校数学を教える土台となっています。そして、所属していた川田研究室では先生が淹れてくださる紅茶を味わいながら、数学の問題を同級生と試行錯誤をして答えに辿り着いたことも思い出に残っています。

現在、幸運にも教員として高校で数学を教え、また顧問として高校野球に携わる機会にも恵まれました。赴任した高校で教えた生徒が岩手大学に入学し、卒業後教員となって活躍していたり、岩手大学硬式野球部に入部し活躍している姿を見たりすることは大変嬉しく、縁を感じています。

大学生活で得たことは、「人との出会いと繋がり」です。もし、入学当初に先輩が私を野球部に勧誘してくれなかったら、小宮山先生の試験を受けていなかったら、現在の私はなく、今こうやって原稿を書いていることもないでしょう。私が目の前の高校生たちに大学進学を勧めるのは、様々な人との出会いを通して、自分が思いもよらなかった世界と繋がり、自分の視野を広げてほしいというのが大きな理由です。私にとってそのような場であった岩手大学に、改めて感謝をしています。

残念ながら現在私は、宮澤賢治のように教職という仕事を通して「疲れをおぼえたことはない」ことはありません。ですが、未来からの風を感じて成長していくであろう生徒たちに真摯に向き合い、これまでの恩返しをしていきたいと思うのです。

(平成13年 中学校教員養成課程 数学科 卒業)



かけがえのない宝物

城 守 崇

今でも年に一度か二度必ず同じ夢を見る。単位が足りず大学を卒業できない夢。自分にとっては『悪夢』であるが、教職を選んだ自分に、「初心」を思い出させてくれる良薬となっていることに気づいたのは、最近のことである。

さて、私が過ごした大学時代と言えば、バブルがはじけた余韻があり、就職口もかなりあったことを覚えている。民間就職が強く、先に就職した先輩が、大手の証券会社に勤め、学生の頃では、1年間アルバイトしても手の届かない額のボーナスをいただいていた。教員採用試験はというと。厳しくもなく甘くもなくといった具合だった。採用同期は80人と記憶している。教員になろうか、はたまた民間に就職しようか大いに悩みながら、目先の飲み代欲しさに、寝る間も惜しんでアルバイトに多くの時間を費やしていた。

そんな自由奔放な学生時代にも、大きな転機が訪れる。卒業するためには何としても取らないといけない「教育実習」の単位である。私たちが学生の頃、平成一桁台は大学4年生の秋口が実習にあたっていた。小学校の実習1か月と中学校の実習が2週間であった。私は附属小学校の6年生に配属となった。同じ学級には、くしくも同じアルバイト先の大吃いの彼（ライバル）がいた。そして、同じ剣道部の力強い仲間もいた。自分も含めて総勢6名のメンバーで、実習生として4週間同じ時間を過ごすこととなる。

結果から言うと、大学の授業の中で間違いなく一番楽しい授業であり実習であり単位であった。そして、かけがえのない時間であった。教職を共にする仲間との出会いと『先生になりたい』と心の底から思ったことを思い出す。毎日の授業の準備のために、毎夜毎夜繰り広げられる展開案に対しての「あーだ、こーだ」。教官からの指導の前に熱いトークバトルがあった。今思うととてもではないが、指導案検討とは言い難い。負けず嫌いの言い合いであった。とにかく、彼よりも子ども達を「笑わせたい」その一心であった。

そして、『運命の日』がやってくる。厳密にいうと、運命を決定づける日である。小学校での教育実習最終日である。「教育実習生ありがとう感謝の会」こんなネーミングだったかと…。ひな壇に並んだ総勢100人は1年生からの「可愛いありがとう」の出し物。6年生からは感謝の気持ちのこもった歌のプレゼント。お返しにと中島みゆきの曲を教生全員で歌った記憶がある。歌い終わった後、隣にいた教生の1人が泣き始めてしまった。「まずい」。気づくと自分も泣いている。泣くどころか号泣している。いや号泣どころか「ボロくそ」に泣いてしまった。体育館がなんとも言えないあったかい雰囲気。1か月間いっしょに過ごした「絆」ともとれる見えない繋がりのようなものがそこにはあった。

その後の話だが、10数回卒業生を卒業担任として送ることとなるが、上着の両方のポケットにはハンカチが1枚ずつとパンツの後ろのポケットにも1枚。合計3枚のハンカチを使っても、涙が止まらない卒業担任となる。

教育実習まで大いに悩んでいた就職に関しても、全く悩むことなく教職一本となる。しかし、大問題があった。

単位が足りない。一般教養を甘く見ていたわけではないがとにかく大慌てで単位を取り始める始末であった。大学1年生といっしょにLD教室で英語の単位を取ったことを最近のここのように鮮明に覚えている。

現在は、担任は外れてしまったが、4年生の算数を2学期から担当させてもらっている。年末に3人の4年生が職員室にごあいさつに来てくれた。「先生、ありがとうございます。」この挨拶に来てくれた3人との空気感はその時の空気感と同じである。先生になって「よかった」心からそう思う。教え子も何人か先生になっている。この空気感を味わっているのだろうか。初夢でまた「いつもの夢を」見させてください。お願いします。

(平成8年 小学校教員養成課程 体育科 卒業)



国語科「中村研究室」

瀧野澤 公 美

大学の4年間は、北上市の自宅から通っていました。2年生までは電車通学で、東北本線に約1時間乗り、盛岡駅から岩手大学まで歩いて20分ほどの道のりを通う日々でした。当時の東北本線は、木の床で座席は対面式、冬になると、とても冷えて、盛岡に着くころには窓が凍り付いていることも度々という状態でした。編み物をしたり読書をしたりしながらの電車通学でしたが、本に夢中になり過ぎて、ふと気が付くと北上駅で慌てて駆け降りたこともありました。大学の構内へは農学部裏の門から入り、教育学部へ抜けます。牛を連れた学生とすれ違ったり、木の幹につながれたヤギに突然追いかけられたり、時間の制約のある自宅からの通学でしたが、それはそれで思い出となっています。

勤め始めてから大学構内を通ると、空気感が違い、時間がゆったり流れているように感じます。学生のときは、自分のすべきことがたくさんあって忙しいように感じていたのですが、離れてみると、学生時代は時間を豊かに使うことのできる時期だったのだと痛感します。

学生時代のことで、今でも鮮明に思い出すのは、国語科の中村一基先生の研究室でのゼミのことです。1・2年生のうちから研究室のゼミに参加していた同級生はいましたが、私は自宅生だったこともあり、研究室に所属したのは3年生の後半だったように記憶しています。最初に参加したのは、川柳ゼミでした。「川柳おもしろいよ。」という複数の友人の言葉に、これまでなかなか訪ねることのできなかった研究室のゼミを覗いてみる勇気が出ました。中村研究室は、中世文学の研究室でしたが、「俳風柳多留」をテキストに、風刺のきいた川柳や遊び心のある川柳をゼミのメンバーの一人が選んで、その川柳の意味を考え合うという少し趣の異なるゼミを行っていました。現代語ではありませんし、当時の文化も理解していないとわからない川柳も多く、ああだこうだと意見を言い合う時間は、とてもおもしろく、忘れられない時間でした。例えば、

「片袖をたす振袖は人の物」

本来着物は、一人の職人が最後まで仕上げるものだそうですが、この呉服屋では、片袖を別の職人が縫っている。つ

まり、それだけ忙しいのか、仕事が雑なのか…。当時の人々の生活ぶりに思いを馳せては、風刺の効いた川柳に笑い合った日々が懐かしく思い出されます。

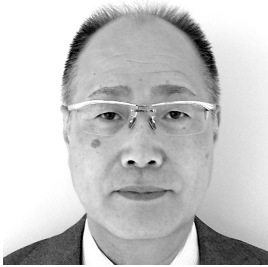
4年生になり、それぞれが卒業論文のテーマを定めると、卒論ゼミが始まりました。調べたことをまとめたもの、卒論の骨子として考えていること、構成…等々、毎週文章でまとめて提出しなければなりません。同級生からの質問にさえしどろもどろになってしまう情けなさを感じたり、着々と卒論の構成要素ができあがっていく友人をうらやましく思ったりしたものでした。緊張感のあるやりとりをしていた卒論ゼミでしたが、書き進めるうちに出口が見えなくなったときには励まし合い、みんなで意見を出し合う中で方向性が定まることもしばしばでした。私の卒論のテーマは、中世文学ではありませんでしたが、中村先生の研究テーマに近いということで指導をお願いし、研究室に受け入れていただきました。中村研究室のほかのメンバーは、一つの文学作品を決め、それについて研究し卒論のテーマとしていました。私はというと、テーマは「黄泉がえり」。地獄から生還する話を集め、その傾向や共通点を探していくという遠大（無謀）なテーマでした。ついには中国文学までルーツを追いかけてしまった私に、中村先生は根気強く指導をしてくれました。なんとか卒業論文という形にすることができたのは、中村先生と研究室の仲間のおかげです。

中村先生が退官なさるとき、記念のパーティに参加しました。「中村研究室同窓会」という形で行いたいとおっしゃったと聞き、気さくな中村先生らしいと思ったものでした。「同窓会」で、短い時間でしたが中村先生とお話しでき、今でも私たち卒業生を気にかけてくださっていることに感激しました。中村研究室で過ごしたかけがえのない時間は、私の教員生活の糧となっており、今後の人生においても大切な宝物として残り続けています。

…中村一基先生は、2018年に急逝されました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。…

(昭和62年 小学校教員養成課程 国語科 卒業)



岩手大学に支えられた教員人生

阿 部 真 一

「花ふみたる 桐の葉を しるしといたく むねのうえ」

卒業から38年たった今でも、ふと岩手大学の学生歌を口ずさむことがある。自分には、母校の岩手大学に深い思い入れを抱かずにはいられない理由がある。

昭和55年、花巻の高校を卒業して岩手大学教育学部に入学した。自分の高校からは大勢の入学者がいたため、大学生活は高校生活の延長のようなスタートだった。それでも、はじめのうちは大学生としての自覚をもって勉学に励もうとしていた。しかし、次第に大学の自由な空気に流され、軸足は勉学ではなく、遊びやアルバイトに移っていった。授業に出たり出なかったりしたため、一般教養の科目が4年生の後期にまで残る羽目となってしまった。

2年生になった頃、小学校課程の学生の科所属が決まり、自分は国語科に入った。国語科を選んだのは、いろいろな科を消去法で消していったら、最後に国語が残ったという後ろ向きの理由からだった。そのため、国語に関して研究したいことも見つからず、ゼミを決めるときにも相当迷った。そこで、当時では珍しい国語科教育を専門にしていた新進気鋭の望月善次先生のゼミに入ることにした。

3年生になると、毎週ゼミに出ていたが、一向に話が頭に入っていない。そもそも、国語の授業や教材に全く関心がなかったのである。もちろん、課題を出されてもレポートを提出できないこともあった。附属中学校で授業をしたことがあったが、子供の顔も全く見えず、ただ質問するだけの間抜けな授業だった。自分は教員に向いていないと心から思った。

とうとう望月研究室を離れ、国文学の中村一基先生の研究室に身を寄せることになった。中村先生の扱うテーマは幅広く、少し変わったものが多かった。自分は、滝沢馬琴の「椿説弓張月」をもとに桃太郎伝説のルーツを探る研究をした。中村先生は数年前に亡くなってしまったが、研究室にあった自分の卒業論文には、自分の筆跡のほかにも数名の人物の筆跡があった。自分の論文が締め切り間に合うように、研究室の仲間たちが清書に協力してくれたのである。

大学を無事に卒業して県内の小学校教員になった。教員になったらもう二度と岩手大学の門をくぐることはないと思っていた。しかし、その後の38年間の教員人生の中の実に18年間は岩手大学とともに過ごすことになったのである。

【岩手大学教育学部附属小学校教諭14年（S63～H13）】

教員になって2校目の勤務は、岩手大学教育学部附属小学校であった。国語科に所属し、国語の授業研究を専門に行うことになった。なぜあのとき望月研究室で真剣に国語教育を学ばなかったのか、なぜ途中で研究室を離れたのか、という後悔の念が込み上げた。望月先生と顔を合わせるのも憚られたが、附属学校なのでそうもいかず、しっかり謝罪し、心を入れ替えて国語教育と向き合うことを誓った。

自分の国語教育の原点は、附属小学校の14年間の研究と実践にある。国語とは何か。授業とは何か。教育とは何か。教師とは何か。1つの具体や事象の裏にある数知れない理論と理想をひたすら追究する日々であった。また、実習校として大学の先生方と交流することも自分の糧となった。

【岩手大学教育学部附属小学校副校長2年（H28～H29）】

校長になって2校目の勤務が再び附属小学校だった。まさか管理職になっても勤務するとは思わなかったが、市町村立の学校とは異なる雰囲気、自然と馴染んでいる自分がいた。管理職になると、大学の会議に出ることが多くなった。附属学校の在り方を検討する会議もあり、岩手大学の置かれている立場や状況が厳しいことも理解できた。学部長や理事との距離も近くなり、様々な要求や意見を出して、それを通してもらった。当時のあたたかい対応に感謝である。

【岩手大学大学院教育学研究科教授2年（H30～R1）】

そのまま岩手大学に残り、教職大学院での勤務となった。教育学部の教授会に参加していると、大学生活をいい加減に過ごした自分が大学教授の一員になっていることが不思議だった。様々な飲み会を通じて、多くの先生方や事務の方々と親しくなり、学長からゴルフに誘われることもあった。同窓会の常任理事にも名を連ねるようになって、岩手大学とのつながりは切っても切れないものとなっていった。

そして、現在も自分は岩手大学教育学部と教職大学院の実習校に校長として勤務している。今思えば、岩手大学は、自分の教員人生の後ろ盾になっていたのだ。

（昭和59年 小学校教員養成課程 国語科 卒業）

[キャンパス便り]



大学での学生生活を振り返って

小 岩 拓 文

(学校教育教員養成課程 特別支援教育コース)

部活動と教育実習。この2つが4年間の大学生活の中でも特に心に残るものであった。

私は小中高と野球を続けていたが、大学では新しいことに挑戦したいと思い、ハンドボール部に入部した。私以外経験者ばかりで、入部当初は全体練習に参加させて貰えなかった。それでも諦めず練習をし続け、2年生になり、試合に出られるようになった。しかし2年生の冬に新型コロナウイルス感染症が発生し、それ以降のリーグ戦は全て中止になった。目標も無くなり、部活を辞めようと考えていた時、引き止めてくれたのはチームメイトだった。「最後までみんなでハンドをしよう。」この言葉があったから、困難があっても、最後まで部活をやり遂げることができた。支えてくれた仲間に関心から感謝したい。

大学生活の中で、最も私の進路に影響を与えたのは教育実習だ。実習では、多くの学びと共に、教師という仕事の大変さや、授業をすることの難しさを身をもって経験した。

試行錯誤をするものの、授業は上手いかず、自分のしていることが無駄に感じてしまう時もあった。最終日、子ども達とのお別れ会があった。コロナ禍での実習だった為、子ども達とは距離を保ちつつ、会が終了した。教室を出ていこうとした時、1人の子どもが抱きついて来たのを皮切りに、クラスのほとんど子ども達が泣きながら抱きついて来てくれた場面があった。その時私のやってきたことは、決して無駄じゃなかったと、子ども達に教えられた。私はあの光景を一生忘れることはない。教師になろうと強く心に誓った出来事だった。

来年度からは教師としての生活が始まる。どんな教師になりたいか考えた時、一人の人間として頼られる教師でありたいと思った。子どもの目線に立ち、共に戦い、悩み、涙を流すことが出来る人間でありたい。これまで沢山の人の支えられてきた分、今後教師として必ず子ども達に還元していく。



出会い

金 英 蓮

(学校教育教員養成課程 中学校コース)

英語サブコース)

岩手大学での生活4年目。時が経つのは本当に早いもので、期待と不安を胸に始まった大学生活が終わりを迎えようとしている。

大学1年目。住まい、人とのかわりなどほとんどが0からのスタートだった。4年目となった今では、ありがたいことに、かけがえのない出会いに溢れている。

友人との、出会い。同じ目標に向かって共に切磋琢磨した友人、高みを目指し努力する友人、自分の憧れだった先輩方。友人や先輩との関わりの中で多くの刺激をもらい、自分自身を奮い立たせることができた。

先生方との、出会い。大学の先生方には講義をはじめ、授業実践や教員採用試験対策など多くの場面でお世話になった。また、附属中学校、附属小学校の先生方には、教科指導、学級経営だけでなく、一人の人間として大切なことを丁寧に指導いただいた。先生方のおかげで、自分が理想とする教師像を明確に描けるようになった。

そして、自分自身との、出会い。これまで夢としていた「教員」という職業が、現実の目標に変わったとき、自分はどんな人になりたいのか、どんな教員になりたいのかを何度

も自分に問いかけた。決まっていたアメリカへの交換留学がコロナの猛威により断念せざるを得ない状況となり、どん底を味わった。しかし、今思えばこの出来事が自分の転機でもあった。できなかったことを悔いるのではなく、これからどうしていくかを見据えることの大切さに気づくことができた。今は予想できない多くの困難が今後待ち受けていると思うが、どんなことにも常に前向きに、自分らしく立ち向かっていきたい。

学びに溢れたこの4年間は、これまでのどの期間よりも濃く、充実した日々となった。これまでの出会い、これからの新しい出会いを大切に、謙虚に学ぶ姿勢を忘れず、春から教員としてさらに成長した人間になれるよう頑張っていきたい。



将来の夢や目標がもたらす幸せ

中 井 美 智

(学校教育教員養成課程 小学校教育コース
社会サブコース)

「小学校の先生になりたい！」私がそう言っていたのは8歳頃からと記憶しているが、本当にその道へと進んでいる今、不思議な気分だ。いつからその将来の夢が目標に変わったのかは分からないが、4年間の大学生活は私に「子どもたちが楽しみながら学習し成長する」ことを支える小学校教員になるという目標をもたらした。

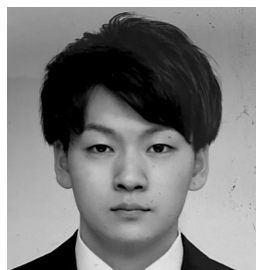
4年間、教育実習以外にも学習ボランティアとして授業や放課後支援に関わったり、サークル活動で児童センターに訪問したりなど、子どもたちと真剣にそして楽しく時には互いに迷いながら過ごす日々は、教員としての子どもとの関わり方を考え実践する貴重なものだったと感じる。夢が目標になったことで自分には教職が向いていないのではな

いかと行き詰まり心が苦しいときもあったが、それでも歩み続けてこられたのは目標を共にする同級生と励まし合いながら意見を交わし切磋琢磨した充実の日々が私を支え成長させてくれていたからに違いない。私も誰かの夢や目標を支えられていたら、と願う。

さて、子どもたちが自分で考えて抱いた夢はどれも素敵である。自身の経験上、夢があると学習や生活の意欲に自発的に繋がるまたは、繋がるよう支援することが出来る。大学生活の中で夢をもてない子どもたちの存在に気付くことも多々あったため、淡いものであっても夢や目標を自然と持たせられる教員になりたいという目標が新たにできた。そのためには確かな指導力と私の人間的な豊かさ・知

識と経験をもっと充実させる必要があると感じ、一度も離れたことの無い地元を離れてみようと考えた。学部卒業後は他大学の教職大学院に進学し、教職の専門性を高めるための学修に励む。卒業後、岩手に帰って実践を重ねる中で目標を遂げたい。

大学生活を支えてくださった諸先生方、大学に関わるスタッフの皆様、先輩や後輩、学友、そして家族への感謝の思いと今後の夢・目標を忘れず、日々学び続けていく。そうして岩手の教育を支える一員になる日に向かって精進していく決意である。



すべてに感謝

我 妻 駿

(学校教育教員養成課程 中学校教育コース
保健体育サブコース)

岩手大学で過ごした4年間は、毎日が充実したものであった。日々の学業や教育実習、教員採用試験、部活動など、1人では乗り越えることのできなかった出来事が山のようであった。しかし、どんな時にも友人や仲間、先生方がそばにいて支えてくれたからこそ最後までやりきることができた。

私は、バスケットボール部に所属していた。部活動では、辛く苦しく思うことも多々あったが、切磋琢磨してきた仲間との何気ない日々がとても楽しく幸せなことだったのだと引退した今は思う。新型コロナウイルスにより、思うように練習ができなくなったり、大会が中止になったりと厳しい環境での部活動となったため、悔いがないとは言いがたいが、バスケットボールを通して学べたこと、得られたことはたくさんあるため、4年間続けてよかったと心から思う。

2度の教育実習を振り返ると、私自身大きく成長することができたと感じている。どんな授業をすれば子どもたちが楽しんで学ぶことができるのか、どんな発問が有効なのか、どんなところに子どもたちは躓くのか、わからないことが多く、不安な気持ちがあったが、実習生同士で意見を

出し合い、何度も失敗を繰り返し、先生方からご指導いただく中で、徐々に自分なりの授業を行えるようになり、成長を実感することができた。教育実習にも新型コロナウイルスの影響があり、子どもたちと満足に関わることはできなかったが、子どもたちと楽しく学ぶことができ、すべてが良い思い出となり、充実した教育実習であった。

いよいよ4月から教師としての生活がスタートする。私は、これまで多くの人に支えられてここまで成長することができた。今度は、私が子どもたちを支え、成長を手助けする側に立つため、私にできることをすべて行い、子どもたちとともに成長し続けていきたい。

[思い出] — 退官される先生方から —

.....
お世話になった教育学部の先生方2名がこの
3月にご退任されます。
.....



ツマとしての教師生活

社会科教育科

宇佐美 公 生

「大学の教師は刺身のツマのようなものだ」という言葉は、私が大学生になったとき、最初に指導して頂いた先生に言われた言葉でした。それを語った先生もご自身の先生から言われたとのこと。たしかに学生にとって大事なものは刺身=学究の対象であって、教師は学生の勉学にはつきものであるけれども、あくまでも添え物=サポート役でしかない。ただ、できれば刺身の美味しさや味わりに彩りを添える「ツマ」でありたいと思ってきました。

倫理学研究室に入ってこられた学生さんは、それまで受験勉強などでやらざるを得なかった学習から解放され、自分の関心で主体的に聞きたい、考えたいという方々が多かったように思います。そして私自身も守備範囲を狭く限定することなく「来るものは拒まず」の方針で受け入れていたので、学生さんたちの関心に付き合う手前、こちらもある程度勉強をさせられました。ニーチェやショーペンハウアー、H. アーレント、J.S. ミルなど過去の著名な哲学者の研究や、生命倫理、環境倫理、企業倫理などといった現代的な諸問題以外にも、魔女や天使、アニメに見られるジェンダーの変遷、昔話や民話の中の死生観など、私の専門からは離れた分野の「問い」を研究テーマに選ぶ学生もいて、そのたびに私も一緒に勉強させてもらいました。その一方で私が専門にしている分野を選ぶ学生は少なく、それは「ツマ」として「刺

身」の魅力を伝えるのが下手だったせいかと、今更ながら反省しています。しかし学生さんの関心に引かれて当時の若い世代の間にこちらが目を開かされたことも確かで、おかげで一人では入って行かなかった路地に入って珍しい料理の店に出会ったり、この路地はこの道に通じていたのか、といった思いがけない発見もさせてもらいました。

倫理学や哲学とはかく座学になりがちな分野でもあるので、30年あまりの教師生活では、なるべく具体的な現場にも出かける機会を設けたいと思っておりました。環境問題とESDに関わって、ドイツに学習旅行を行ったのをはじめ、紫波町の循環型町づくりの学習では、10年以上同町にお邪魔させていただきました。ただ、最後の5～6年は、私自身が学部運営の仕事にかかわることが多く、特にこの2年間はコロナ禍もあって、あまり学生と一緒に現場に出かけることができませんでした。それだけが今となっては心残りですが、卒業生の皆さんのそれぞれの現場での今後のご活躍をお祈り致しております。



岩手大学だからできたこと、
できること

国語科教育科

田 中 成 行

石川県能登半島の七尾に生まれ育ち、隣の富山県の農婦の方が「いたいがやああ」と苦しむ姿をテレビで見て、イタイイタイ病の公害を無くすためカドミウムの毒性を知らせようと地元七尾高校の理系に進み、毒と知って廃液を流したと知り、知識の前に人にとって何が大切かを考え、その心を表現し合う文学文芸アートや、本気の対話を通して学び合う国語教育を目指し、東京学芸大学、同大学院の後、中学を中心に各校種の現場で三十年、

岩手大学で六年間、まず人のよさ心の花を大切に学ばせて頂きました。

現地の山梨柳を眺め触れつつ『やまなし』『虔十公園林』等の宮沢賢治や『一握の砂』の石川啄木研究、古典歌舞劇・能の研究、大野眞男先生や山崎憲治先生・山崎友子先生のご指導で被災地を訪れ「命を守る言葉」の「姉吉の碑文」等の災害文化の研究を継続しました。日々の実践は定番教材や古典教材の研究を、まず「原文」を感動するまで読み込み、諸研究を丁寧に理解する「作品研究」の徹底を目指しました。その上で、一人ひとりの児童生徒の意見を、誤読でなくその子なりの根拠ある意見として寄り添い本気で受け止め合い、「自分ごと」として実感でき「一人の作者」として自覚して表現し合えるような実態に即した「教材研究」を、具体的な実習の成果と課題を生かしつつ、コロナ禍の中でも誠実で実行力ある岩大生諸君と共に追究しました。『セロ弾きのゴーシュ』の郭公の子孫が朝と夜と盛岡の町中に「かっこう」と鳴き続け、農業教育資料館の標本室にはヨタカからチョウザメの剥製までがずらりと並び、そのまま賢治童話の世界が生まれると気づきました。日本歌謡学会を開催し、地元の方々や在校生の演者の鬼剣舞を上演した時、生活に生き続ける芸能の力を実感し合えました。『雨ニモマケズ』の「ヒドリ」と教えられる手帳の原文が「ヒドリ」であることを多くの学生が知らず、同じ手帳の劇「土偶坊」に「ヒドリ」があり詩の「ヒドリ」のドをデに訂正した例もあり「日照り（旱）」の「誤記」説は有力であるが、方言としての「ヒドリ」の「お葬式」説や小作人の「日雇い」説が受講生の家族や祖父母等で使っている証言も毎回必ず数例報告され、訛って「ヒドリ」と言う「一人」説等と共に、まず原文が「ヒドリ」であり、諸説あって共感する人々の一人一人の解釈の豊かな岩手の物語があることを尊重し共有することを目指しました。

「雨後の筍」を東北・北海道出身の学生の多くが知らないと知った『竹取物語』の通読で、かぐや姫の結婚観「深き心ざし」の大切さや、育ての親翁と媼の血の涙を流す愛情や、一度は連れ去ろうとした帝が「きと影に」なられて考えを変え、和歌を添えた手紙で三年間文通し、「御心を互ひに慰め給」い、お互いの心を通わせ合い深き心となって、最後にかぐや姫と帝が歌を交わし「人は愛する人と生きるために生きる」と学び合えました。この部分が削られた現行教科書にもぜひ引用したいと考えます。

魯迅作『故郷』の裕福な都市育ちの「私」が幼い頃未知の海辺の豊かな世界を伝える農民の子閏土にあこがれ、大人になり再会した時「私」の視点で閏土の外見を、顔は深いしわ、目も赤く腫れ、手は節くれびひ割れ、と否定的に見た後、「私は感激で胸がいっぱいになり」の竹内好訳の「感激」を長年納得がいかず、原文が「興奮」とわかり、肯定否定両方の感情の高まりを表す「興奮」に教科書の訳を直すべきだと考えます。藪敏裕先生や劉海宇先生の案内で中国に三度訪れ、浙江省の魯迅の故郷を訪ね、寧波大学日本語学科で『故郷』の臨時講義をさせて頂き学生諸君の共感を頂きましたので、さらに教科書訂正を目指します。

905年成立『古今和歌集』仮名序の「やまと歌は人の心を種として万の言の葉とぞなれりける」の「和歌（詩）こそが人の心を表現できる」詩論を小学校や中学1年生から学ぶこと等、道半ば退職後も提案し続けます。



[事務局だより]

令和3年度も前年度と同様に、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、評議員会や理事会は対面での開催が叶わず、書面での表決を余儀なくされました。常任理事会も県内の感染者が増加していた9月頃にはメールでの協議とならざるを得ない時期もあり、コロナ禍からの出口を模索する1年でしたが、明るい話題もあります。卒業記念品のトートバッグを北桐会員でデザイナーの鈴木駿一さんにお渡しし新デザインで2022年3月卒業生から配布することとなりました。同じく北桐会員で東京オリンピックに陸上男子20km競歩の日本代表選手として出場した高橋英輝さんが11月12日に北桐会からの応援へのお礼と報告に来訪され、大会のエピソードや今後の目標などをお聞きすることができました。

以下、今年度6月からの主な活動を時系列で報告いたします。

令和3年

- 6月18日 令和3年度第1回理事会（書面開催：期間6月18日～24日、結果報告6月30日）
- 7月1日 今年度分名簿メンテナンスの打ち合わせ会員異動についてメンテナンス依頼
- 6月29日 印刷担当者と評議員会資料印刷製本について打ち合わせ
- 7月15日 第62回評議員会（書面表決開催：期間7月15日～26日、結果報告7月30日）
- 7月26日 評議員会結果について打ち合わせ
- 7月27日 北桐会報『北桐』編集委員の推薦を、仁王小、緑が丘小、上田中、黒石野中、附属小、附属中へ依頼
- 7月29日 同窓会連合年会費30万円振込
- 7月30日 卒業記念品発注（9月15日納品受領済）
- 8月3日 ホームページ新旧担当引き継ぎ
- 8月4日 ホームページ更新
- 9月1日 北桐会報『北桐』編集委員6名決定。委嘱状を送付
- 9月7日 令和3年度第1回常任理事会（メール会議）開催
- 9月10日 担当者とオンラインにて名簿作成計画打ち合わせ

- 9月13日 令和3年度第2回常任理事会（メール会議）
- 9月17日 北桐会員、東京オリンピック競歩代表高橋英輝選手へ激励費贈呈
- 9月18日 学長との懇談会へ小笠原会長出席
- 9月21日 令和4年度教育学研究科入学選抜試験合格者への同窓会入会案内17部を学部副事務長へ送付依頼
- 9月22日 新会員データ追加、名簿作成提案書（案）受け取り
- 9月24日 9月卒業式 卒業生に『北桐』60号と卒業記念品キャンバストートバッグを贈呈（学部卒業生2名）
- 9月28日 第1回『北桐』編集委員会
- 10月14日 同窓会連合運営委員会
- 10月18日 第3回常任理事会開催についての打ち合わせ
- 11月1日 第3回常任理事会
- 11月11日 令和4年度推薦入学選抜試験合格者への同窓会入会案内65部を学部副事務長へ送付依頼
- 11月12日 北桐会員、東京オリンピック競歩出場高橋英輝選手来訪
- 11月17日 第2回『北桐』編集委員会
- 11月19日 同窓会連合会報原稿提出

[連絡とお願い]

- 会員の住所変更・改姓や会報不着等ご連絡は、本誌折り込み葉書を利用して事務局へご連絡ください。
- 恩師や会員のご逝去の際には弔電をお届けすることになっております。もし情報が入りましたらできるだけ速やかに事務局までご連絡ください。
- 新たに支部を設立する地域がございましたら、本部までお問い合わせください。名簿等の資料と設立準備金を提供いたします。
- 発行協力費がたくさん寄せられています。ご協力いただきました会員の皆様に厚く感謝を申し上げますとともに、引き続きご協力の程お願いいたします。
- 同窓会活動へのご意見ご提案をお待ちしています。
- 岩手大学同窓会連合会報も同封いたしますのでご覧ください。

編集後記

おかげさまで「北桐」61号が完成し、会員の皆様にお届けすることができます。
お忙しい中、快くご執筆・ご協力いただいた方々に、誌上より厚く御礼申し上げます。

今回の特集は、「児童・生徒の可能性を引き出す 特別支援教育の今」と題し、
岩手県の特別支援教育の歴史や現状について、様々な立場で携わっている同窓生の方々にご寄稿いただきました。

特別支援教育は、教育の原点ともいわれます。それは特別支援教育で大切にされている、幼児・児童・生徒一人一人を愛おしみ、その可能性を引き出すための適切な指導や支援が、全ての教育に通底するからだ、私は考えます。

特別支援教育は、今や特別なものではなく当たり前の教育として、日々教室で実践されています。先生方の熱意と努力、創意工夫が岩手の特別支援教育を支えていることを、本特集を通じて感じることができました。

また、「共に学び、共に育つ教育」を忘れず、幼児・児童・生徒と教師が共に育っていくことができる学びを創っていききたいと心に刻むことができました。

「北桐」は今後も、皆様のご協力を支えに、誌面の充実に尽くして参りたいと思います。なお、会員の皆様にご協力いただいた発行・発送協力費は、発送経費の一部に充当させていただいております。引き続き、ご理解とご協力をお願いいたします。

最後に、会員の皆様のますますのご健康とご活躍を、編集委員一同お祈りし、編集後記といたします。

(J)

北 桐

第61号

令和4年3月14日発行

●発行 岩手大学教育学部同窓会（北桐会）

会 長 小笠原 義 文

〒020-8550 盛岡市上田三丁目18-33

TEL・FAX 019-621-6618

<http://www.edu.iwate-u.ac.jp/hokutou/>
hokutou@iwate-u.ac.jp

●編集 北桐編集委員会

委員長 菅 原 純 也

●印刷 (株) 杜 陵 印 刷

〒020-0122 盛岡市みたけ二丁目22-50

TEL 019-641-8000

FAX 019-641-8085